

平和・友好・アジアの女性が連帯を

日本国憲法守りぬく決意あらたに

新日本婦人の会会長 高田 公子

戦後六〇年、憲法改悪や小泉首相の靖国参拜問題、侵略戦争を美化する「つくる会」教科書検定合格など日本の危険な動きに、アジアの各地で抗議の声が高まっていきます。アメリカと一緒に頑張って海外で戦争できる国づくりへすもうとする小泉首相だけが日本の姿ではなく、地道に草の根で活動しているも

うひとつの日本の姿を知らせ、女性たちとの連帯をつよめたいとアジアの歴史を計画しました。

一九九九年以降、二国間交流をつづけてきた中国、国連NGOの認証資格もつた新婦人が、この間の国際活動を通じて信頼関係を築いてきた韓国、フィリピンの女性団体との交流が実現し、韓国(七月二〜四日)、フィリピン(五〜七日)、中国(一一・一二日)を歴訪し、友好と連帯を深めることができました。

(平野恵美子国際部長と神出泉中央常任委員が同行)

**憲法は北東アジア
みんなの財産—韓国**

韓国女性団体連合(KWAU)は、一九八七年に創立、六つの地域セクションと二八の加盟団体で構成し、男女平等、民主主義、朝鮮半島の平和的統一をめざし、女性団体の共同をすすめています。

チョン・ヒョンベク(成均館大学教授)共同代表とチョウ・ヨンスク事務局長と懇談、夕食をともにし、心ひらいた交流になりました。お互いに「近い」韓国と日本が協力してアジアの平和のために過去をのりこえて、よりよい歴史を築くために力をつくしたい。また、経済のグローバル化のもとで共通する課題も多く、



▲チョウ事務局長、チョン共同代表、高田会長、平野国際部長

济援助問題で賛否両論、いろいろな意見があるなかで、彼女たちは非暴力の草の根からの運動を大切にして

今後も交流を通じて解決へのとりくみをもにすすめることを話し合いました。

KWAUは、特に祖国の統一を強く願っています。そのためにも、「アジアの平和がなよりの保障、日本の憲法は東北アジアのみんながなんとしても守らなければならぬ共同の財産」と何度も発言。日本では北朝鮮の脅威がおおられています。日本では北朝鮮の脅威がおおられています。攻めてくるのはアメリカであり、それに加担しているのが日本政府、韓国の人びとは自分たちがまきこまれていくことをとても心配しています」と。

また、北朝鮮との軍事対決やアメリカの干渉のもとで基地問題や北朝鮮への経済援助問題

います。日々の生活のなかで、民主主義と平和がなにより大切との思いを、韓国女性みんなのものにしていくことを重視。同時に北朝鮮との交流をすすめて相互理解を深めています。このような日々の活動の努力によって、一〇〇以上ある米軍基地の撤去や祖国の平和的統一の展望も生まれてくると、長期的展望をもち現実をみさえ、しつかり地に足をつけて活動している姿に心をうたれました。

また、女性分野でもKWAUは暴力根絶や女性の人權・地位向上のために、法律の制定や改正を政府へ提言、四〇年間のたかいで戸主制度を撤廃したほか性産業を禁止する法制度などが実現しています。同時に新婦人と同じように多様な要求で運動しています。

働く女性の七三%が非正規、賃金は男性の五六%、出生率は一・一七%、保育所など公的分野を市場として民営化がおしすすめられているなど、矛盾もいっぱいあります。武器や軍事費よりも子どもたちや福祉にどの運動も私たちと一緒に。思わず「連帯してたたかきましょう」と固く握手しあいました。

基地なくせば 共通の課題—フィリピン

ガブリエラ（フィリピン女性団体連合）は、八四年創立のフィリピンで最大の女性組織で、二〇〇団体が加盟しています。エミー・デ・ヘスス事務局長はじめガートルードス全国評議会役員、エミリー・カヒログ国際部長などと懇談・交流しました。

ガブリエラも平和、女性の人權、地位向上、くらしや健康などあらゆる課題で草の根から活動にとりくんでいるところが新婦人とよく似ています。とくに貧困の問題にとりくみ、社会のもつとも弱い立場の人たちを組織していることや、各大



▲ガブリエラのメンバーと交流

学にガブリエラの支部をつくるなど、若い女性の組織づくりを力を入れ、また、地域で健康や医療、法律など具体的なメリットある相談

活動のとりにくみで、信頼を得ている経験にもおおいに学ばされました。

基地問題では、「基地は撤去させたが、アメリカと協定が結ばれ、米軍が駐留する権利を確立。合同演習もつづいており、小学校に米軍機が墜落し、建物の三分の二が壊されるなど、重大な事故がおこっている」とうかがい、沖縄でのあつをたたない少女暴行事件や墜落事故など思い、アジアからアメリカの基地をなくす運動での連帯の重要性を痛感しました。

また、日本と同様、フィリピンの教科書にも、「慰安婦」の記述がないことから、ガブリエラでは「子どもたちに歴史の真実を」と交渉し、記述することを約束させました。ところが国がなかなか約束を守らず、ガブリエラは自分たちでパンフレットをつくり、普及する活動をしています。また、マニラ市の公園に「慰安婦」の碑を建てる運動にとりくみ、〇三年に実現、いま、二つ目の碑の建設めざし運動をつづけています。その碑には「次の世代に慰安婦をつくらない。そのために戦争を再びおこさない」決意が記されており、碑の前に佇んだときは、こみ上げてくるものがありました。

友情と連帯、

やうに深めて―中国

中国では、中華全国婦女連合会の、顧秀連主席（全人代副委員長）、趙少華副主席、張静国際部長らと懇談、昼食会に招待されました。反日デモの影響で、日本からの訪問が少ないこの時期に新婦人が訪中したことを、「この時期にきて、いろいろな情報を提供してくださったことに感謝し、感動しています」と、ことのほか歓迎してくださったのです。

この七月に盧溝橋事件六八周年の節目を迎えましたが、靖国神社は盧溝橋事件についても中国の責任であるかのように宣伝していることや、メディアは反中国

◀顧秀連主席と懇談



感情をおおるような報道していることとあわせて、でも私たちは歴史にしっかり向きあい活動していることを話しました。

顧主席の「中国と日本は歴史問題など

むずかしい問題を抱えています。私たちが女性の力で交流をすすめ、歴史を鏡として、歴史を忘れず、未来に向かって友好を深め、国の関係にも有益になるよう影響をおよぼしていきたい。女性は平和を愛しています。平和のために協力し、友情と理解を深めることが大切。忙しいなか、じかに活動を伝えてくださったこと、とつてもよかったです。民間の力はたいしたものですよ」という話には、今後も力を合わせ、友好・協力をすすめていきたいという思いがあふれていました。張静国際部長は「憲法を守る声が国民の過半数になることを期待しています。婦女連が新婦人に協力できることがあれば…。例えば、小組フェスタに太極拳やヨガで講師を派遣するなど、文化交流もしたいですね…」と楽しい提案。

また、顧主席は新婦人との一回目の交流（一九九九年）で日本を訪れた時のことを、「横須賀基地や大宮（支部）の親子リズム小組の印象がとても強かった」と語り、新婦人の草の根での活動に期待をよせられました。大会へむかって、「知恵のある活動」とほめられた小組を数多くつくって新婦人を大きくしたい思いで

いっぱいになりました。

日本国憲法守りぬく

決意を胸に刻んで

歴訪した国々はいずれも日本の侵略と植民地支配が多大な犠牲をひきおこしたところであり、それだけに首相の靖国参拝や教科書問題、憲法改悪の動きなど、日本がまた自分たちの脅威になるのではないかという強い懸念を持っている。同時に「九条の会」のひろがりや、女性たちの憲法を守る草の根からの活動を、グッツも見せてリアルに伝えたことで、「アジアの平和を守るために力を合わせよう」という思いをいっそう深く共有しあうことができました。

「アジアと世界の平和にとって憲法は共同の財産」「そのために必要なことは何でもしたい」とあつく語られたことは、胸に迫るものがありました。アジア諸国民に犠牲を強いた反省のうえにつくられた憲法九条を守ることは、東北アジアに平和と安定をもたらすし、そのことが、軍事力で世界支配を企むアメリカの手を縛ることにつながるのだと確信しました。

韓国で、日本軍「慰安婦」の方がたが共同生活しているナムムの家を訪問し、彼女たちと語らい、資料館の地下に再現されている慰安所を見学、フィリピンのボニフォシオ公園に建つ慰安婦の碑や、サンチャゴ砦に残されている日本軍に何百人も殺された竹林につつまれた洞窟などをじかにみて、身のおきどころのない苦しさにおそわれました。

そして、ナムムの家でお会いしたハルモニたちの日本女性へのやさしさと心づかいにふれ、人間のすばらしさに心ゆさぶられました。消し去ることのできない過去の歴史の事実の重みと、日本軍のおかした罪の大きさにしつかり向き合ったとき、私はあらためて日本国憲法を守りぬく決意を胸に刻みました。

とりわけ日本軍「慰安婦」の方々は、自身に刻みつけられた痛みや傷を、二度と誰にも繰り返させてはいけなと、重い口を開き、毎週ソウルの日本大使館前で行動を一四年間も続けています。日本でも最も暑いこの八月に、高齢をおして座り込みを計画していると伺いました。女性に対する戦時性暴力をなくすことは、二度と再び戦争をおこさせないこと、そのことをあらためて彼女たちに約

束し、これからの毎日を丁寧に生きていこうと心に誓いました。

韓国、フィリピン、中国とのそれぞれの懇談のなかで、共通して出された関心と質問があります。それは、憲法や教科書問題はもちろん、過去を清算せずなせ日の丸を国旗としているのか、日の丸・君が代の強制がどうして法律で決められているのか、若い世代に運動が引き継がれているのか、日本の女性の共同のひろがりなどでした。

また、国連の常任理事国入りについても、「いまの日本の歴史認識では賛成できない」「平和の保障がない」と言われ、「日本女性も同じ気持ち。国際社会で尊敬され、アジアの姉妹からも応援していただけるような日本を築くために力をつきたい」と述べた決意に共感がよせられました。

エネルギーシユでゆたかな

創意ある活動―女性組織はいつしょ

今回初めて訪問した韓国、フィリピンとともに女性や子どもたちのおかれてい



▲ガブリエラの事務所

だけに、くらしや教育、女性の地位向上、平等・平和などの課題も共通しています。そのなかで、広範な女性たちの多様な要求を解決するために、創意あるゆたかな活動を繰りひろげていることや、要求実現のためには非暴力、平和主義で、草の根で運動する女性たちが手をつなぐことの大切さなど、「新婦人と同じ」となんども共感しあうことしきり。

しかも私たちと同じく、女性たちの草の根の願いを束ねて奮闘する一人ひとりのスタッフは若きも老いも、生きがいにもえ輝いています。お金もなく（専従も多くがボランティア）、でもひたむきで目のまわるような多忙さに疲れも見せず、エネルギーシユに働いている姿は全国の新婦人の専従者や会員の一人ひとりと重なり、この女性たちの力が歴史を前へおすすめていられるんだと胸が熱くなりました。それぞれの国のたたかいが一つに結びついていることに、大きな連帯感と日本女性の責任の重さを実感した日々でもありました。

（たかだ・きみこ）

案にされました。

新婦人は、番組改ざんに対して全国から抗議するとともに、日本軍「慰安婦」問題に対する誠意ある謝罪や賠償をもとめて、問題解決のための法律を制定するよう請願署名にとりこんでいます。「慰安婦」問題アジア連帯会議にも、賛同を表明し参加してきました。

憲法改悪の動きをめぐって

国会では政権党の自民・公明党だけでなく民主党も改憲を主張し、改憲勢力は9割をこえています。そのねらいは、9条をかえて、アメリカの要請にこたえ海外での戦争に自衛隊を参加させ、武力行使ができるようにすることにあります。多くのマスコミも政府の立場を代弁するばかりで、私たちの主張や運動はほとんどとりあげません。しかし、国民の過半数は9条改悪に反対しています。

憲法改悪に反対し9条をまもる運動は、昨年6月、日本の良識を代表する9人の方々の呼びかけで「9条の会」のアピールが発表されて以降、急速に保守・革新をとわず大きくひろがっています。この1年間で地域、階層、分野の「9条の会」は2500をこえて結成、女性「9条の会」の賛同者も900人にひろがっています。新日本婦人の会は、日本が再び「戦争する国」になることを決して許すことはできないと、全力をあげて奮闘しています。

日米軍事同盟の強化と米軍基地建設、再編強化をめぐって

日本各地に135箇所もの米軍基地が存在し、そこには5万8千人の米軍が駐留、その費用を日本が肩代わりし負担しています。イラク戦争のようなアメリカの専制攻撃の戦争に、日本を世界のどこにでも参戦させていく体制づくりとして米軍の新基地建設、再編が強まっています。それに反対する自治体・住民ぐるみの運動がいま大きくひろがっています。沖縄では、宜野湾市での米軍ヘリの墜落に怒りが爆発。辺野古沖への海上基地建設に反対するたたかいは9年間続き、全国からの支援のもとにおじい・おばあなど人生をかけた座り込みは430日も続けられています。神奈川県座間市では、新婦人の支部長が、基地の再編強化反対の要求をかかげて市長選挙に立候補し善戦、その結果、当選した保守市長も基地反対に変化し、自治体ぐるみの運動が周辺自治体にもひろがっています。アメリカ言いなりの日米軍事同盟から脱して、アジアの国々と友好・連帯をふかめ、対等・平等の自主外交をもとめ行動しています。

日本は過去の戦争の加害国であり、同時に唯一の被爆国で、いまなお30万人の被爆者がくるしみぬいています。新日本婦人の会は、侵略戦争の深い反省のうえにたって国連憲章の「平和のルール」、日本国憲法9条を守って、日本がアジアと世界の国々から信頼される国となって、平和な世界の未来をきり拓いていくために、いっそう努力することを決意しています。

付く常任理事国入りについて

侵略戦争への反省の上でできた国連です。日本が国連憲章にもとづいて「戦争のない」世界をつくるためにより重要な役割を果たす常任理事国に入ることは賛成。但し次のような条件がみたされれば賛成

- ①日本が、世界とアジアから信頼される国になること
- ②自主外交の国になる

そのうえで、国連憲章の「軍事参謀委員会」の規定を見直し、常任理事国への軍事的な義務付けをなくす方向での憲章の見直しで、日本国憲法9条を生かす方向で常任委員会の役割發揮。

韓国・フィリピン(2005年7月2～7日)、中国(11・12日)訪問にあたって

新日本婦人の会会長 高田 公子

今年2005年は戦後・被爆60年を迎え、あらためて侵略戦争の深い反省のうえに、アジアと世界の平和のために貢献し、とりわけアジアの人々から信頼される日本になることがなにより必要だと痛感しています。しかし、小泉政権は憲法改悪をねらい、地球的規模での日米軍事同盟の再編・強化をおしすすめています。そうしたなかで、過去の戦争を肯定する歴史観がメディアや教育の分野までひろがり、首相の靖国神社参拝、侵略戦争美化の教科書の検定合格、学校での「日の丸・君が代」の強要、教育基本法改悪などの危険な動きがかつてないほどつよまっています。

いま歴史に逆行する動きがつよまるなかで、憲法を変えて戦争できる国づくりへの道をなんとかしても阻止するために、新日本婦人の会(会員、20万人、読者30万人。1962年結成。国連NGO認証団体)は総力をあげ奮闘しています。侵略と植民地支配の歴史にむきあい、アジア太平洋地域から平和な世界を築きあげるためにも、みなさんと親しく懇談し、連帯を強めたいと思います。

首相の靖国参拝や侵略戦争美化の教科書採択の動きをめぐって

いま靖国神社の「公式の立場」は、「日本には戦争犯罪などなかった、敵である連合軍が一方的な裁判で押し付けた濡れ衣だ、その立場でA級戦犯を神様として合祀した」というものであり、過去の戦争は「正しい戦争だった」と宣伝するところとなっています。首相がそこに参拝することは、靖国神社の立場に同意し、侵略戦争を正当化する以外のなものでもありません。アジア各国から抗議が殺到し、日本国内の世論も「参拝すべきでない」が過半数を超えています。小泉首相は中止を表明すべきです。また今年も、次年度から使う中学校教科書を各自治体で決める年です。「新しい歴史教科書をつくる会」という右翼団体が、歴史的事実をねじ曲げ、侵略戦争と植民地支配を正当化する教科書をつくり、それを採択させる策動をつよめています。この動きは、憲法や教育基本法改悪をねらう勢力と一体に、「アメリカとともに海外で戦争する日本」のために命をささげる「愛国心」を子どもたちに植え付けることが目的です。全国各地の学校で「日の丸・君が代」の強制がすすみ、とくに超右翼的立場の石原知事のもとで、首都東京では「君が代」を歌わない教師には処罰も強行するなど、異常な事態になっています。

それに対して、新婦人は多くの人びとと共同して運動をすすめてきました。誤った歴史観や社会観を植えつける教科書を採択しないよう、教育委員会に要請したり、宣伝や署名に力をつくしています。また、我が子が通う学校へ「日の丸・君が代」を強制しないよう申し入れを繰り返しおこなってきました。

「戦時性暴力」、いわゆる日本軍「慰安婦」問題をめぐって

政治の舞台で過去の戦争肯定論が横行するなかで、日本軍「慰安婦」問題が意識的に隠蔽されようとしています。中学校歴史教科書から「慰安婦」のことが削除され、自民党議員の圧力で「慰安婦」問題の国家責任を問うNHKのテレビ番組が、改ざんされる事件が起きました。それは2000年12月新婦人も賛同しておこなった「女性国際戦犯法廷」の内容をNHKが放送するにあたって、日本政府の「国家責任」、昭和天皇はじめ旧日本軍高官に「有罪」が言い渡された「判決」や、日本軍「慰安婦」の証言がカットした事件でした。また、政府は日本軍「慰安婦」問題は「女性のためのアジア平和国民基金」による償い金で、決着済みだとして、法的責任を拒否し続けています。超党派の国会議員が提出した日本軍「慰安婦」問題の解決を促進する法案は、自民党などの数の力で過去5回も廃

特集 韓国・フィリピン・中国歴訪

あたたかい交流で学び感じたこと

新婦人中央常任委員 神出 泉

韓国・ナムムの家

レポート

7月2日～4日

下車駅を

まちがえた！

七月二日夕方、仁川（インチョン）国際空港は小雨に煙っていました。「ああ、韓国も梅雨だったんだ」と、ちょっとがっかりした気分が入国。

翌朝、昨日からの雨はやむ配はなく、「市内の写真は無理かも」と少し残念。この日は元日本軍「慰安婦」が共同で暮らしている「ナムムの家」を訪問しました。早朝、ホテルを出発して、地下鉄と市外バス、タクシーを乗り継ぎますが、途中で地下鉄を下車する駅を間違えるハプニングがありました。

駅員さんに「二番線の電車に乗り換えて」と言われたの（であろう）を、「一番出口から出

る」と勘違い。改札を出ても市外バスの停留所がない。それらしきバス停で、おじさんに「広州（クアンジュ）市行きのバスは？」と漢字を交えて尋ねても埒が明かず。おじさんは奥から若者を連れてきてくれ、地図を広げ指差しながら説明され、初めて私たちが下車駅を間違えたことに気づきました。再度、駅に戻ると、先ほどの駅員さんが雨に濡れたあわれな（？）三人の日本人に切符を料金もとらずに再発行。自動改札機でモタモタしている私に「日本人ですか？」と声をかけ（もちろん日本語で）、切符を入れる場所を親切に教えてくれた年配男性、「広州」と書いた漢字をわざわざ中年の女性客に確認してくれたバスの運転手さんなど、韓国人たちの優しさを実感した「ナムムの家」までの道中でした。

祖国も言葉も

うばわれ

「ナムムの家」に着くと、両

脇には日本軍「慰安婦」歴史館があり、正面にはチマチヨゴリを着た少女の銅像が目に入りました。金順徳（キム・スンドク）ハルモニが描いた絵「手折られた花」（右下の絵）をモチーフにしたもので、この銅像の下の地下に慰安所の模型があり、過去の苦しみを地下に沈め、空に向かって前向きに過ごせるよう



「ナムムの家」の正面



「手折られた花」 金順徳



ちが描いた絵が掲げられていた。これは戦後、彼女たちの心の傷を癒すためのひとつとして取り組まれたもの。姜徳景ハルモニが描いた「責任者を処罰しろ―平和のために」（15ページ二段目の絵）は、想像以上の大きさで絵の前に立つと圧倒されるほど。樹に縛られ目隠しされたひげの男性（昭和天皇？）に銃口を向け、周りには平和を象徴する六羽のハトと六個の卵が描かれています。最期まで責任者の処罰を求めていたハルモニの強い憤りとともに、未来への希望をこの絵に託したのでは…と感じました。



「日本軍『慰安婦』の証言」

忘れてはならない

「ハルモニたちといっしょに食事して行ってください」とスタッフの方に誘われました。新婦人から持参したピースタオルをハルモニ一人ひとりにプレゼントし、昨日「ナムムの家」に来たばかりという日本の女子留学生を「通訳」に、ハルモニと少し話をするのができました。中国に連れて行かれ「慰安婦」になったハルモニは、戦後すぐに帰国できず三〇年間、日本にいたと言います。

流暢な日本語で、自分が元「慰



元日本軍「慰安婦」たちと高田会長（中央右）と平野国際部長（中央左）

安婦」であったことを身内には言えなかったが「ナムムの家」に入るときに、初めて伝えたことなどを淡々と話してくれました。

韓国では一八〇人の元「慰安婦」が申告し、そのうち五〇人が名乗り出ています。高齢化し、長年のつらい体験から体を壊し、入院しているハルモニもいて、日本政府は一日も早く、ハルモニたちに誠実な謝罪をすべきだと痛感しました。

しかし、日本では、日本軍「慰安婦」の記述が学校の歴史教科書から削除され、侵略戦争を正



「ナムムの家」の庭にある「傷の河」

当化する「つくる会」教科書の採択の動きなど、反動的な傾向が強まっています。ハルモニたちにとつて忘れてしまいたいであろう「慰安婦」、「慰安所」の展示が、この「ナムムの家」にあることは、私たちに「忘れてはならない」と訴えているように思えました。

私たちがすべきこと、それは「二度と戦争を起こしてはならない、二度とこのような性暴力を起こさせてはならないことだ」と、雨に濡れる「ナムムの家」を後にしながら強く思いました。

フィリピン

レポート

7月5日～7日

雑多でエネルギッシュな
フィリピン

韓国・仁川国際空港から飛行機で四時間、フィリピン・マニラ空港に着陸。フィリピンも雨季で、一番暑い時期は三月から五月と言いますが、この時期も蒸し暑さが肌にまとわりつくよう。ホテルまでタクシーで移動しますが、車線があるのかわいのか、とにかくちよつともすき間があれば「ビー、ビー」とクラクションを鳴らして、ヒョイと車が入ってきます。これで事故は起きないの？ と不思議なほど。道路は幅いっぱいにしてすべて車、車。バスや自転車は皆無で、「ジブニー」とよばれる乗り合いジープが庶民の足のようでした。この車道を平気で横

切る人たちにもびつくり。何しろ信号機があまりないため、車が走っているときに横切るものだから、私たち三人はタクシーの中から「こわい、こわい」を連発。センターラインすれすれにドライバー目当ての、タバコや果物を売る男性たちの姿が印象的でした。雑多な、エネルギッシュな、しかし何か危なげな……というのがフィリピンの第一印象でした。

新婦人との共通点も

新婦人とガブリエラとの交流



「ジブニー」とよばれる乗り合いジープ



アロヨ政権汚職問題に関する政治フォーラム

は今回が初めてです。私たちが一行が訪問した時期は、アロヨ大統領の選挙不正疑惑、大統領の身内が関わったとされる宝くじ汚職事件、そして経済危機と、大統領の辞任を求める世論の高まりのなかでした。フィリピン大学で行われたアロヨ政権汚職問題に関する政治フォーラムに、私たちもガブリエラのメンバーの案内で参加し、高田公子会長が連帯のあいさつをしました。

ガブリエラのメンバーとレス



マスコミ各社、T V局も取材した政治フォーラムであいさつする高田会長

トランで昼食をともしながら、ガブリエラの概略―一九八四年三月一三日にフィリピン全国女性連合が設立したこと、「ガブリエラ」という名称は、スペインとの反乱で先頭に立った女性の名前からとったこと、加盟団体には農村女性の団体、ユースの団体、「慰安婦」を支援す



宣伝グッズがいたるところに

る団体、都市貧困層の団体など二〇〇もあることなどを説明してくれました。歓談するなかで、私たち新婦人の活動と共通点が多いことに共感を覚えましました。

「私はフルタイムのボランティア」というガブリエラ全国評議会役員のガートルードさん。交通費や通信費など「実費」程度の活動費でがんばっていること、事務所の棚には、Tシャツやバッジ、木製のアクセサリや小物などが並べられ、財政活動をしていると言います。最近では、アロヨ大統領の辞任を



みんなでグッズづくり(ガブリエラ事務所で)

求める行動として、「選挙の不正」、「宝くじ汚職」、「経済危機」の三つのメッセージを書いたコーヒーを、午前五時（フィリピンではラッシュ時！）ごろから通りで売るなど、活動もユニークです。

事務所を訪問した日は、ガブリエラのメンバーは集会、宣伝用のプラカードやグッズづくりの真っ最中でした。この日、加盟する団体の代表者と交流したのは、大学生たちを中心とした「ユース」の代表、都市貧困層の団体の代表、そして日本軍慰安婦」を支援する団体の代表ら

でした。

若者たち

「ユース」の活動

「ユース」は、フィリピン大学を中心にした学生らで組織され学生が直面している問題をとりあげている団体です。

フィリピン政府は日本と同様、教育予算を削減しているため、いすの不足、三〇人の教室に六、七〇人も詰め込んでの授業や入りきれなければ屋外で授業しているなど深刻です。教育予算のカットのしわ寄せが学生たちに影響をおよぼし、授業料を払えずに大学をやめていく学生もいます。全国的には大学に入学しても七四%がやめていると言います。高校進学率は五割で、大学に三割が進学し、卒業できるのは一割であること、フィリピンではハイスクールまでが義務教育ですが、実際は寄付を求められたり、家から足りないいすを持つてくるようにと言われ、経済的に余裕のない家の



新婦人の「憲法バンダナ」をさっそく頭に

子どもは学校に通えないと言います。

国立大学では、授業料の値上げのほかに、電気料金やコンビニエーター費、スポーツ費などの徴収もあります。トイレも学生が当番で修理や掃除をしている状況で、数千人の学生がいる校舎でトイレはほとんどが壊れていて、男女とも一つのトイレしかないという悲惨な状況もあります。学生一人あたり一万五〇〇〇ペソ（学期分）かかりますが、労働者の最低賃金が一〇二〇〇ペソであることから、いかに負担が大きいか分かりま



ガブリエラのメンバーと

す。授業料のほかに教科書費、参考書代、寮費などもかかり、授業料が払えず「売春」をして学費を稼がざるを得ない女子学生もいて、「ユース」では、これをなくす運動もしています。「ユース」ではクラスで学習会を組織し、なぜこのような問題が起きているのかを話し合っています。また夏休みには地域に出て、仕事を手伝ったり、医療支援の活動をしているグループも。また「もう一つの授業」と言って、教授にお願いして今の政治状況などの意見を出し合う授業もしていると紹介されました。

底辺で生きる人たちにも

都市貧困層の団体はガブリエラができる一年前の一九八三年に結成し、加盟団体のなかで二番目に会員が多いと言います。都市貧困層の団体の活動をビデオを使って説明してくれました。

フィリピン政府は二〇〇一年から二〇〇四年にかけてマニラ湾に面したスラムに住む人々を強制撤去しましたが、政府が与えてくれた団地や家は、と殺場の近くなど、とてもひどい環境にあり、しかも政府は七五〇ペソの家賃を要求しています。しかし、そこに住む人たちは「スモーカーマウンテン」でのごみ拾いや工場やスーパー、港や工事現場など低賃金で働き、とても家賃を払う余裕はありません。しかし家賃が払えないと、いつまた強制撤去させられるかわからないと不安を抱えています。

した。

そこで都市貧困層の女性たちが「サマカナ」という組織（ガブリエラ加盟）をつくって立ち上がった。彼女たちは「ガブリエラと出会って勇気が出た」、「私たちは新鮮な空気と安心して住める場所がほしだけ」と言います。底辺でくらししている層に手をさしのべているガブリエラの活動に感動を覚えました。



旧日本軍によって600人もの捕りよがこの洞くつに閉じこめられ、飢餓と窒息で亡くなった

日本軍「慰安婦」を支援するリラ・ピリピーナの代表は、日本政府に対し、過去の侵略戦争の被害者に対する公式の謝罪

ガブリエラの運動で日本軍「慰安婦」の碑が建てられた
(マニラ市内の公園で)



と賠償を求めるとともに、その責任をはたさないうちは国連の常任理事国入りする資格はないと、国際署名に取り組んでいることなどが紹介されました。

平和を求める活動とともに、各団体の草の根の切実な要求で運動しているガブリエラの活動の一端を知ることができ、今後、日本女性と共通の課題で交流できると実感できました。

(じんでいずみ)

